

横須賀市野比地区の脊椎動物相 —哺乳類・鳥類・両生類・爬虫類・魚類—

林 公義*・鈴木茂也**・柴田敏隆***

Vertebrate fauna in the Nobi area, Yokosuka City, Kanagawa Prefecture

Masayoshi HAYASHI*, Shigeya SUZUKI** and Toshitaka SHIBATA***

During the period from April to August 1988, we investigated the vertebrate fauna including mammals, birds, amphibians, reptiles and freshwater fishes in the Nobi area of Yokosuka City, Kanagawa Prefecture. The mammal fauna is poor, and only three species, *i. e.* the raccoon dog (*Nyctereutes procyonides*), Japanese weasel (*Mustela itatsi*) and common rabbit (*Oryctolagus cuniculus*), were identified. The raccoon dog is on the increase around crowded houses at present. 31 bird species in 18 families were identified. Of the 31 species, 21 are resident birds, 3 are summer birds, 5 are winter birds, 2 species were identified only by their songs. 5 species in 4 families of Amphibia inhabited the Nobi area. Especially many egg cases of *Hynobius nebulosus tokyoensis* were observed from four water systems. 9 species in 4 families of Reptilia were identified, and two of them, *Achalimus spinalis* and *Amphisma vibakari vibakari*, are rare not only in the Nobi area but also in the Miura Peninsula at present. As to freshwater fishes only one species of the goby (*Rhinogobius* sp.) inhabited three water systems.

はじめに

横須賀市野比地区に関する脊椎動物相の調査と報告例はない。野比地区の北方, 神明町南側斜面一帯は, 近年まで米軍接収地として一般の出入りができなかったこと, 「谷戸田」および「鏡田」のある野比地区の南斜面はホタル類など特異な動物群の存在が知られていたが, 総合的な動物相に関する報告はない。また久里浜地区に隣接する区域の緑地公園などは市民の利用に供され, 横須賀市の南東部における数少ない自然空間が残されている環境といえる。近年, 横須賀市内にはこのように人為的な影響を受けていない自然環境が減少し, その地域の生物相が明かにされないまま経過したことが少なくない。特に人間生活の影響を強く受けやすい大型哺乳類や鳥類

などの生息状況は, 現在の三浦半島開発計画の促進度とあわせ考えると早急な調査と資料作成が必要である。1988年の4月から8月にかけて野比地区の生物相と環境を調査をする機会があり, 著者らは脊椎動物相調査を担当した。その結果, 哺乳類3種・鳥類31種・両生類5種・爬虫類9種・魚類1種を調査対象地区から記録できた。三浦半島の単位面積にみる種の生息密度を考えると, 一部の種に関しては野比地区が他地区と比較して優位とみられる数量が確認できた。本報ではこれらの調査結果を示し, あわせて特徴ある種の生息状況について述べる。

調査方法

調査期間は1988年4月から8月に行った。調査対象区域は第1図に示したように谷戸(No.1~6)と水系(A~

* 横須賀市自然博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238.

** 日本野鳥の会神奈川支部 Kanagawa Branch, Wild Bird Society of Japan, Yokohama 245.

*** 横須賀市平作 5-3-20 Hirasaku 5-3-20, Yokosuka 238.

原稿受付 1990年9月30日 横須賀市博物館業績 第406号

キーワード: 脊椎動物, 動物相, 三浦半島 Key words: fauna, Miura Peninsula, vertebrate

F)を中心に踏査した。哺乳類・鳥類については、谷戸を中心にロードサイド・センサスを行い、目視記録を収集した。両生類・爬虫類・魚類については、主に水系に沿って踏査し、目視による記録も行った。また淡水魚の一部については資料を採集し生態型を同定し、地域住民の協力を得て生息している種の情報収集も行った。両生類と魚類の調査については林が、鳥類については鈴木が、哺乳類と爬虫類については柴田が主として担当した。

調査地の概況

調査地は、三浦半島中央部の東端に位置し、横須賀市神明町と野比にまたがる約100haの山林である。南側を東京湾、東側を火力発電所、北側を住宅等で囲まれ、森林としては他からはほぼ孤立している。山頂部は東西に延長し、稜線は標高100～130mに達する。マテバシイを主とする照葉樹の二次林がほとんどを占めているが、地域の中心部の北側は久里浜緑地として一部が伐採されていた。稜線の北側(神明地区)に4本の谷、南側(野比地区)に4本の谷が存在し、かつてはそれぞれ水田や畑地として耕作されていた。現在は一部を除いて耕作されていない。休耕地はヨシやススキなどの植物が繁り、灌木が生じてそのまま斜面の林に続いているところもある。神明地区の3本の谷では、すでに谷が人為的に埋め立てられている場所もある。他の谷は入口付近まで住宅や学校がせまっている。水系については年間を通して水量は少なく、流路の勾配は急である。したがって平瀬はほとんどなく、水深の浅い淵場が点在する河川形態である。水路は上流域で分枝することは少なく、水源は主として山間

への浸透水である。下流域では一部が用水路として活用され、住宅地に近い場所では護岸されている。

調査結果

1. 生息が確認された脊椎動物目録

本調査で生息が確認された哺乳類3種・鳥類31種・両生類5種・爬虫類9種・魚類2種については地域別出現状況とともに第1表に示した。

2. 野比地域で特筆すべき脊椎動物

哺乳類

本調査で確認できた哺乳類はホンダタヌキ・ホンDOIタチ・ノウサギの3種であった。いずれも一年を通して本地域に生息可能な種類である。ノウサギについてはカイウサギの野生化したものと推定される。この地域内の生態系の中で高次補食者に相当するこれら中型哺乳類が生息することは、今後環境指標種として注目できる。小型ネズミの1種カヤネズミが本調査地域内で捕獲されていること、ヤギ類と推定される糞を確認しているなどの情報を私信で入手できたが、調査期間中には確認できなかった。

○ホンダタヌキ *Nyctereutes procyonides*

調査地域の山林地内に生息していることが、目撃や食痕などから確認された。いくつかの水系では川底の軟泥地に足跡がよく残っているのが認められ、サワガニを食べた痕跡も発見され(水系B)、脱糞の跡も谷戸の山道で数多く観察された。人家にたびたび出没することも付近の住民から情報収集できたが、生息個体数を推定できる情報は集められなかった。調査地域には中型哺乳類が人為的な餌の補給を受けずに生活できるだけの多くの種子や果実、昆虫類が餌として存在し、基本的な生活環境としての照葉樹林が良好な状態で残されている。

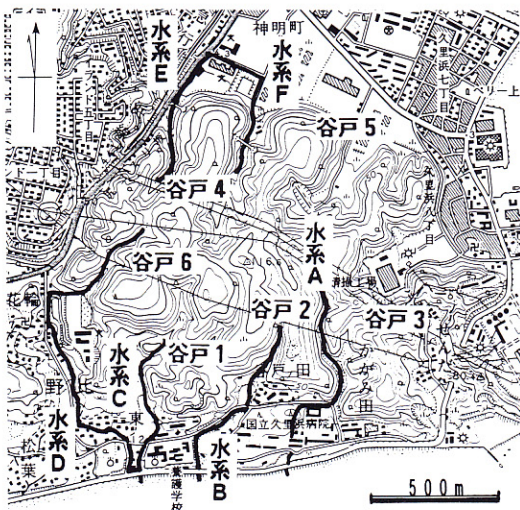
鳥類

調査期間中に6目18科31種の鳥類が確認できた。留鳥は21種、夏鳥3種、冬鳥5種、上空を通過したもの1種(サシバ)、鳴き声の記録による1種(モズ)という構成であった。ほとんど陸上生活種で、調査期間中に水鳥類は観察されなかった。

○サシバ *Butastur indicus*

上空通過個体を調査期間中に目撃したが、継続的な生息は確認できなかった。本種はかつて三浦半島の山林に普通に見られ、谷間の水田をおもな餌場としていたが、近年では激減した猛禽類である。野比地区では森林の面積や地形との関連から推測して、繁殖地としての利用が可能と思われる。

○フクロウ *Strix uralensis*



第1図 横須賀市野比の調査区域。

第1表 野比調査地域で生息確認された脊椎動物。

生息種	調査地点					
	谷戸 No.・水系					
	1C	2B	3A	4E	5F	6D
ホンドタヌキ	★		★	★		★
ホンドイタチ	★	★		★		
ノウサギ					★	
トビ	11	14	9		●	2
サシバ	○					
コジュケイ	7	4	10			10
キジバト	3	5	1			0
フクロウ	0	1	0			0
コゲラ	0	3	0	●		1
ツバメ	36	2	4			2
キセキレイ						●
ハクセキレイ	3	0	0			0
セグロセキレイ						○
ヒヨドリ	29	8	6	●	●	13
モズ	1	0	0			0
イソヒヨドリ						○
シロハラ	●	●	●	●	●	●
ツグミ	●			●	●	
ヤブサメ	0	0	2			0
ウグイス	22	4	14	●	●	3
サンコウチョウ	1	0	0			0
エナガ	●				●	
シジュウカラ	2	4	3		●	9
メジロ	6	10	0		●	4
ホオジロ	22	7	12		●	3
アオジ	●	●	●	●	●	●
クロジ				●		
カワラヒワ	●					
シメ	●					
スズメ	33	29	22			2
ムクドリ	0	4	0	●	●	0
オナガ	●				●	
ハシブトガラス	13	27	22		●	18
ハシボンガラス	0	2	0		●	1
トウキョウサンショウウオ	●	●	●			●
ニホンイモリ	●	●	●			●
ヤマアカガエル	●	●	●	●		●
ニホンアマガエル	●	●	●	●	●	●
シュレーゲルアオガエル	●	●	●			●
ニホンカナヘビ	●	●	●	●		●
ニホントカゲ		●	●		●	
タカチホヘビ			●			
ヒバカリ	●					
ヤマカガシ	●	●				
アオダイショウ		●	●	●		
ジムグリ	●					
シマヘビ				●		
マムシ	●		●	●		●
クロヨシノボリ		●	●			●
ウナギ		◎				

★ 足跡・糞塊で確認; ● 目視・鳴き声による確認; 数字 目撃した数;
○ 谷戸と谷戸間で確認; ◎ 聞き込みによる確認

谷戸の2と3で確認され、1987年には同じ谷戸の3で繁殖が確認されているので、継続して繁殖維持が行なわれていると推定できる。本種の食性は小型哺乳類や小鳥類が主であるので、食物循環では高次消費者に位置しており、生物相の豊かな環境にだけ生息可能となる。従っ

て本種は本調査地域の自然度を示す重要な指標種としての存在である。

○ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

調査地の全域で比較的個体数が多く、送電線の鉄塔には20~30羽が集合しているのが度々観察された。夏期の小規模な集団ねぐらの中間集合地としての可能性がある。また山頂部や近隣の公園に捨てられる残飯類が本種を集めるきっかけになっているとも考えられる。本種は他の野鳥類の卵や雛を盗食する習性もあるので、地域内の野鳥の繁殖成功率を低下させることも十分予想される。本地域の利用に関しては本種の数の増加を抑制するような手段が必要である。

両生類

本調査地の両生類は、サンショウウオ科1種、イモリ科1種、アカガエル科1種、アマガエル科2種が確認された。湿地や水田、用水路などの環境が、近年激減している三浦半島では最も生息数の減少した動物群のひとつである。現状の三浦半島内では局地的に分布しているにすぎない種が、調査地区だけでも比較的多産していることは大変貴重である。しかし野比地区に残存する水田は少なく、しかも休耕田としての形態が今後両生類の繁殖に影響をおよぼすと予想される。

○トウキョウサンショウウオ *Hynobius nebulosus tokyoensis*

4本の水系(A・B・C・D)で観察されたが、すべて卵囊で、調査期間中は成体を確認できなかった。卵囊の数は各水系によって異なり、多い場所では46卵囊(23腹分)の産卵が確認された。三浦半島での産卵期は2~3月なので、本調査地にはすでに産卵を終えた成体が近くの湿地に相当数生息するものと推定できる。本種は極めて限られた水系にだけ分布することが知られており(安斉・椎原, 1988)、最も早急な保護対策が必要とされる種である。夏期の水枯れ現象や卵囊の盗難などによる成体の減少を防ぐことが、本調査にも必要とされる。

○シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii*

本種は谷戸1, 2, 3, 6の水田地帯で多数生息が確認できた。本種の産卵生態はアマガエルなどと異なり、水田中に放卵するのではなく、畔道などの土中に泡状の卵塊を産みつけるので特殊といえる。現況では水田が減少したこともあって、アマガエルよりも生息数は少ない。単位面積にすると横須賀市内では本調査地域以上に本種が生息する地域はあまりない。

爬虫類

調査期間に確認された爬虫類は、カナヘビ科1種、トカゲ科1種、マムシ科1種、ナミヘビ科6種であった。ヌマガメ科(イシガメ・クサガメ)やヤモリ科(ニホンヤ

モリ)については地域住民からも情報は得られなかった。ヘビ類は食性が種によって限定されるので、確認できた生息数の多少にかかわらずそこに生息する種の多様性が豊かな生物相を示唆している。特にタカチホヘビやヒバカリなどが生息するには、質の高い自然度を必要とする。

○タカチホヘビ *Achalimus spinalis*

本種は、三浦半島中部の二子・大楠・武山山地と近隣の水系のみから記録され、局地的な分布をしている。これらの場所は、現状の三浦半島にあっては優れた森林と水系が保存されている環境である。本種の食性は主にミミズ類で、落葉の堆積があり、湿性が高く保水性に富む環境を条件とする。調査地内にある谷戸環境には、前述したような本種の生活に適した場所がみられる。

○ヒバカリ *Amphisma vibakari vibakari*

本種もタカチホヘビと同様に、生息環境に制約をうけるヘビ類である。沢すじなど湿った環境を選択し、かつ補食する餌類はオタマジャクシ、稚ガエル、小魚、ミミズなどである。谷戸の1に連なる水田と水系Cの両湿性環境が本種の生息を可能にしていると推定できる。同様な環境は他にも存在するが、本種は上記の場所で2回目撃されただけである。

魚 類

生息が確認できたのはハゼ科のヨシノボリ1種だけであった。住民の情報ではウナギも生息しているということであるが、調査期間中には確認できなかった。しかし近年ではウナギはほとんど見かけなくなったという情報も得た。コイ科魚類が生産できるような淵場が地形の関係もあって水系に存在しないこと、溜池がないことなどが魚類相を貧弱にしている。ヨシノボリやウナギは両側回遊型の淡水魚なので、河口の自然環境が両種の遡上率を左右していると考えられる。

○クロヨシノボリ(ヨシノボリ黒色型) *Rhinogobius* sp.

水系A・B・Dで確認できた。従来より用いられていたヨシノボリの黒色型で、近年本種の和名をクロヨシノボリとしている(水野, 1989)。各水系に分布するものは水系ごとに特有な体斑紋はなかった。体長組成の観点からは、上流域に淵場が少ないために、餌の捕食競争があり個体群の成長抑制がおこなわれていると推測された。上原(1980, 1984)によれば、本種はヨシノボリ類の中では最も暖流に依存しており、狭温水性のため極めて分布がきざられているとしている。本種の野比地区(北緯35°12'から35°13')における分布地点は千葉県側での分布の北限緯度(北緯35°10')とほぼ一致する。また本種の東京湾沿岸の流入河川での分布が稀であるという現況を考えれば、野比地区での本種の存在は特筆すべきである。

ま と め

一地域の自然環境を脊椎動物相からだけで検討することは決して十分な試みとはいえない。脊椎動物の生態学的地位は、食物循環を軸とした場合にかなり高次消費者の立場にある動物群が多い。またこの高次消費者を支えるための大量の被補食者を維持するに十分な環境は、質の高い環境と考えられる。本調査における脊椎動物相の検討は十分とはいえないが、野比地区の現自然環境と将来の環境予測を考える上で次のいくつかの結論を示している。

哺乳類の現況からみると、中型哺乳類ではタヌキが雑食性でありイタチが肉食性なので両種の間には餌をめぐる生存競争は問題にならない。タヌキについては近隣の住宅地への生活圏の拡大が今後予想される。調査では確認できなかったが、イタチや猛禽類(フクロウ・サシバ)が主に補食し、彼らの生活を維持するための小型ネズミ類がかかり生息するはずである。三浦半島のなかでも中型哺乳類を維持できる環境は現在は極めて少ないといえる。鳥類については、調査地域やその周辺で繁殖が確認されたか、その可能性の高いと思われるものは21種であり、一般的に市街地や住宅地でも営巣繁殖しているものが11種、森林や農耕地でなければ繁殖しないものが10種であった。森林面積とそこに生息し繁殖する鳥類の種数とは大きな関係があり、関東地方ではおよそ10haで10種類、2000haで30種類程度といわれている(樋口ほか, 1982)。この場合、水鳥類・フクロウ・ツバメ・セキレイは除外して考えられているので、本調査地域(約100ha)については現在の段階では16種なので、繁殖する鳥類の種数という観点からは一般的といえる。調査した4本の谷戸では谷戸の1が最も環境の多様性に富み(森林・草地・耕作地)、あとは順に環境要素が単純化してゆく。しかしそれぞれの谷戸別環境における全調査月の出現種数は11~15種で大差なく、環境については基本的に差はない。両生・爬虫類については、多くの種が環境選択の幅が狭いので、調査地の自然環境が現状維持されたとしても個体群の増加はあまり望めない。さらにここでは廃田が今後は確実に増えるので、両生・爬虫類にとっては生息環境だけでなく餌としての被補食者(水生昆虫類)も減少することになる。とりわけトウキョウサンショウウオについては早急な保護対策が必要とされる。魚類については、本調査地区の生態系の一部を担っているに過ぎないが、これらの水生生物が質的量的に保存されてきたという事実は、すべての生物資源を包括している野比地区での環境の均衡が保たれているということを示している。

示唆している。

謝 辞

本報は、昭和63年度に実施した「ホタルの里づくり基本計画策定調査団」の基礎調査に著者らが参画したときの資料をまとめたものである。報告を終わるにあたり、調査の機会をくださったホタルの里づくり基本計画策定調査団々長の羽根田弥太氏に深く感謝をする。また同調査地の情報収集については横須賀市自然博物館学芸員の蟹江康光、大場信義、大森雄治氏らの協力を得た。付記して謝意を表する。

引用文献

- 安西友巳・椎原丈行 1988. 横須賀・三浦地区におけるトウキョウサンショウウオとイモリの分布について. 横須賀市博館報, (31): 24-26.
- 上原伸一 1980. 房総半島におけるヨシノボリの5色斑型の分布. 横須賀市博研報 [自然], (27): 19-35.
- 上原伸一 1984. 東北地方におけるヨシノボリの4型の分布. 横須賀市博研報 [自然], (32): 33-49.
- 樋口広芳・塚本洋三・花輪信一・武田宗也 1982. 森林面積と鳥の種数との関係. 日本野鳥の会 *Strix*, 1: 70-78.
- 水野信彦 1989. クロヨシノボリ, 日本の淡水魚(川那部浩哉・水野信彦編): 588, 山と溪谷社.

